

高等女学校の研究（第二報）

——高女卒業生のアンケート調査から——

山本 禮子
福田 須美子

高等女学校令が一八九九年に發布されて以来、日本における近代公教育における女子中等教育は、男女別学体制のもとに発足し、展開していった。「女子ニ須要ナル高等普通教育」を目的とした発足当初の高等女学校は、健全な中流階級を形成するために男子のみならず女子にもそれ相応の教育を施すとして、賢母良妻を育成することを提唱した。一九一八年の臨時教育審議会では、「国体ノ觀念ヲ鞏固ニシ淑徳節操ヲ重ンズルノ精神ヲ涵養」するとの答申案を示した。これら一連の女子中等教育施策に対して民本主義的な風潮が一般庶民の中に浸透し良妻賢母主義に対する反発が胎動する。このような相剋の中にあつてわが国の女子中等教育は普及・拡大し、高等女学校教育に対する社会の要求が高まっていく。しかし、その後、急速に超国家主義の政策に学校教育のみならず、国民全体が組み込まれ高等女学校教育も時代の要請に順応し、さらに、その後の大きな歴史の転換にともなう教育制度の改革によつて終焉する。

約半世紀の間続いた高等女学校の実態をそこに学んだ人々の立場から捉え直すことは、高等女学校史を明らかにする上で重要なアプローチの一方法であると考ええる。

それと同時に今日、男女共学の制度を取りながら男女比が著しくアンバランスで男子優遇の措置を取っている高校や、共学を意図し運営して四十年たった現在では共学とは名ばかりで実状は女子のみの学校になっている高校等があるなかで、今後の望ましい男女平等教育を推進するための示唆をも得たいと願っている。

一、調査目的

高等女学校卒業生が高齢化するなかにあつて、彼女達が高等女学校で教え、育まれたものが何であり、それが今日の生き様にどのような影響を及ぼしたと意識しているかを把握するため、アンケートを実施し、各々の学校史を裏付けつつ、高等女学校教育の実情及び高女生の生活実態を明らかにすることを目的とする。

二、調査の概要

(一) 対象と方法

これまでの研究で活用してきた学校史刊行の四八の同窓会に照会し、卒業生対象のアンケートを依頼、それに応じて送付されてきた二九の学校(但しその内二校は個人の紹介)の卒業生名簿をもとに、一九一〇年から五年おきに各学年三〇名(三〇名未満の年度は全員)を無作為抽出して、アンケート用紙を郵送、回答を求めた。学校によっては卒業生なしの年度があり、その場合は次年度を調査対象とした。

(二) 調査期間 一九八六年一〜三月

(三) 回収状況

実質発送数 四七二四

有効回答数 一五八七

回収率 三三・五九%

アンケート対象校ならびに学校別回収状況は表一参照。なお、アンケートの様式は最後に付表として添付する。

三、調査結果

本論文においては、統計的処理からみた調査結果に重点を置き、主として年次別変容状況と、高等女学校の類型別差異に着眼する。

表1 学校別・卒業年次別有効アンケート回答数

類型	高等女学校名(現高校名)	卒業年次									計
		1910 (明43)	1915 (大4)	1920 (大9)	1925 (大14)	1930 (昭5)	1935 (昭10)	1940 (昭15)	1945 (昭20)		
I	山形県立山形高女(山形西高校)	1	3	4	7	8	10	19	14	66	
I'	山形県立酒田高女(酒田西高校)	1	4	10	10	9	10	10	9	63	
II	山形県立谷地高女(谷地高校)				7	4	8	7	9	35	
I	宮城県立第一高女(宮城第一女子高校)	1	5	4	7	6	11	13	13	60	
II	福島県立相馬高女(相馬高校)	0	1	1	8	6	16	11	10	53	
I'	新潟県立長岡高女(長岡大手高校)	0	1	5	12	7	5	11	10	51	
I	群馬県立前橋高女(前橋女子高校)		3	1	8	8	6	9	6	41	
II	群馬県立渋川高女(渋川女子高校)				6	8	10	8	12	44	
I	栃木県立宇都宮高女(宇都宮女子高校)	1	6	8	10	9	12	17	12	75	
I'	埼玉県立熊谷高女(熊谷女子高校)		3	8	10	10	13	12	9	65	
II	埼玉県立春日部高女(春日部女子高校)		2	1	3	3	10	8	9	36	
I	東京府立第一高女(都立白鷗高校)	0	4	8	7	8	15	14	12	68	
III	東京府立第五高女(都立富士高校)				16	17	13	11	15	72	
III	東京府立深川高女(都立深川高校)					11	10	14	8	43	
I	千葉県立千葉高女(千葉女子高校)	1	1	4	6	7	9	9	12	49	
I'	千葉県立東金高女(東金高校)		2	6	10	10	13	6	9	56	
II	静岡県立富士高女(吉原高校)	0	0	4	10	13	12	12	9	60	
III	長野県立諏訪高女(諏訪二葉高校)	0	7	12	16	16	10	15	7	83	
I	大阪府立大手前高女(大手前高校)	1	1	5	7	12	9	8	10	53	
III	岡山県立和気高女(和気閑谷高校)				6	10	12	12	8	48	
I'	山口県立下関高女(下関南高校)		1	6	6	12	15	8	9	57	
I'	愛媛県立西条高女(西条高校)	0	1	6	9	9	10	12	11	58	
III	徳島県立小松島高女(小松島高校)						8	10	7	25	
II	福岡県立京都高女(京都高校)			4	5	12	9	9	12	51	
II	福岡県立糸島高女(糸島高校)				10	7	6	8	8	39	
I	熊本県立第一高女(第一高校)	1	7	8	16	7	10	10	15	74	
III	熊本県立第二高女(第一高校)				10	8	9	10	12	49	
II	熊本県立八代高女(八代高校)	0	0	9	10	9	12	10	5	55	
I	大分県立第一高女(大分上野丘高校)	0	0	8	0	10	12	11	9	50	
	その他(他校、校名不明の分)	0	1	1	1	1	0	2	2	8	
	計	7	53	123	233	257	305	316	293	1,587	

類型の分類は、次の通りである。

第一類型：高等女学校令発布期に創設された学校：九校

第二類型：上記の学校と相前後して創設された学校：六校

第三類型：実科高等女学校から組織変更した高等女学校：八校

進学者増にともなう一九二〇年以降に設立された学校：六校

各学校の類型は表一に併記した。なお、職業分類は第一類型と第二類型を別々に統計を取ったが、その他は両者に差がないため第二類型に一括して表示した。

卒業年次別・類型別のアンケート回収数は次の通りである。

卒業年次別
アンケート回収数

年次	回収数
1910	7
1915	52
1920	122
1925	232
1930	256
1935	305
1940	314
1945	291

類型別
アンケート回収数

類型	回収数
第一類型	886
第二類型	373
第三類型	320

(一) 生活環境

1 父の職業

高女生の家庭の経済的基盤を探るため、父親の職業の分類を行った。ただし、父親が死亡等で不在の場合はそれにかわる保護者の職業を分類対象とした(表二)。

全体的にみると自営商業が最も多く二一%、次いで農業、会社員・銀行員それぞれ一四%、官吏の一〇%と続く。高女が急増する一九二〇年代以降は農業の漸減、それに対して会社員の漸増の傾向がある。当時の国勢調査の結果と比較したのが表三である。これで歴

表2 父(主たる)職業

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察															1	0.4
裁判所											2	0.7	2	0.7		
軍人			3	6.1	1	0.9	3	1.5	5	2.0	10	3.6	2	0.7	9	3.5
官吏	2	28.6	5	10.2	10	9.0	14	7.4	27	11.0	31	11.2	31	10.6	28	11.0
市町村長・議員等			1	2.0	3	2.7	6	3.2	2	0.8	8	2.9	2	0.7	2	0.8
地主			4	8.2	10	9.0	8	4.2	13	5.3	8	2.9	4	1.4	4	1.6
大企業経営者			1	2.0	5	4.5	4	2.1	3	1.2	6	2.1	3	1.0	5	2.0
中小企業経営者					1	0.9	7	3.7	4	1.6	5	1.8	8	2.7	3	1.2
恩給・金利生活者					1	0.9	2	1.1	2	0.8						
農・林・漁業	1	14.3	3	6.1	12	10.8	38	20.1	40	16.3	38	13.8	39	13.4	30	11.8
自営商業	1	14.3	14	28.6	24	21.6	41	21.7	59	24.1	49	17.8	54	18.5	59	23.2
自営工業・製造業			2	4.1	11	9.9	16	8.5	22	9.0	20	7.2	31	10.6	23	9.1
医療関係者	1	14.3	1	2.0	4	3.6	12	6.3	10	4.1	20	7.2	18	6.2	16	6.3
教員	1	14.3	5	10.2	9	8.1	12	6.3	18	7.3	28	10.1	35	12.0	22	8.6
神職・住職			1	2.0	5	4.5			3	1.2	2	0.7	9	3.1	3	1.2
技術者	1	14.3	1	2.0	1	0.9	3	1.5	4	1.6	9	3.2	4	1.4	1	0.4
会社員・銀行員			6	12.2	13	11.7	19	10.1	30	12.2	36	13.0	43	14.7	48	18.9
自由業			2	4.1	1	0.9	4	2.1	3	1.2	4	1.4	6	2.1		
工場労働者													1	0.3		
計	7	100.0	49	100.0	111	100.0	189	100.0	245	100.0	276	100.0	292	100.0	254	100.0

表2-2 父(主なる)の職業(類型別)

職業分類	第1類型		第1'類型		第2類型		第3類型		合計	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察			1	0.3					1	0.1
裁判所			1	0.3	1	0.3	2	0.7	4	0.3
軍人	20	4.3	5	1.6	1	0.3	12	4.0	33	2.3
官吏	54	11.5	38	11.8	31	9.3	25	8.3	148	10.4
市町村長・議員等	5	1.1	6	1.9	7	2.1	6	2.0	24	1.7
地主	20	4.3	12	3.7	13	3.9	6	2.0	51	3.6
大企業経営者	10	2.1	3	0.9	9	2.7	5	1.7	27	1.9
中小企業経営者	15	3.2	2	0.6	5	1.5	6	2.0	28	2.0
恩給・金利生活者			2	0.6	1	0.3	2	0.7	5	0.4
農・林・漁業	28	6.0	41	12.7	85	25.4	47	15.6	201	14.1
自営商業	102	21.7	75	23.3	62	18.5	62	20.6	301	21.1
自営工業・製造業	39	8.3	20	6.2	32	9.6	34	11.3	125	8.8
医療関係者	43	9.1	17	5.3	13	3.9	9	3.0	82	5.8
教員	36	7.7	31	9.6	34	10.1	29	9.6	130	9.1
神職・住職	7	1.5	6	1.9	8	2.4	2	0.7	23	1.6
技術者	11	2.3	5	1.6	4	1.2	4	1.3	24	1.7
会社員・銀行員	69	14.7	53	16.5	27	8.1	46	15.3	195	13.7
自由業	11	2.3	3	0.9	2	0.6	4	1.3	20	1.4
工場労働者			1	0.3					1	0.1
計	470	100.0	322	100.0	335	100.0	301	100.0	1,423	100.0

然とすることは、高女生の家庭は第一次産業従業者が非常に少なく、逆に第三次産業従業者の数が全国平均に比し二・五倍に達していることである。しかも徐々に増えている。しかし、全国的には減少している第一次産業が高女生の家庭の職業としては、増加もしくは現状維持であることを考え合わせるときに、高等女学校急増は農村をも含めた中流階級の子女の進学要求を満たしていったとみることが出来る。特にこの傾向は高女令発布当時の高等女学校生徒の出身階層と比較すると、農業を家業とする層が六・四%から一四・一%ともっとも増加率が高くなっている。さてこれを高女類型でみると、実科高女から移行した第二類型に農・林・漁業が多く、その分会社員・銀行員の率が低くなっている。学校の立地条件が反映しているものと思われるし、先に指摘した高女の普及の姿を立証している。

2 母の職業

母親の仕事の分類も父の職業分類に準拠し、医療関係と教師とを必要に応じて細分した(表四)。これを見ると、回答数が父親のそれに比し二三・二%と低くなっている。これは、いわゆる専業主婦が八割近くいることを意味する。また、男性の職業と異なり、茶花道教師・和洋裁仕立といった趣味もしくは内職に相当する職業があるところにも特徴がある。もっとも多いのが農業で半数近くを占める。次いで商業の二六%で両者とも夫の仕事の補佐的役割を担った場合が多かったといえよう。しかし、医師・教員はじめ企業の経営者としてまた自営製造業を切盛りする女性もあり、職業に専任として関わる母親の人数は五一人と少ないものの、全回答者の三・六%に相当する。類型別にみると教員・自営商業が第一類型に多く、農業従事者が他に比して少ない。これも地域的な要因によるものと思われる。

3 家族構成

① 核家族化

一九一五、二〇年は、核家族対大家族の比が三対二あるが、一九三〇年以降は二対一と核家族の占める割合が多くなる(表五参照)。戦前は祖父母との同居世帯が多かったと言われるが、この

表3 高女生の家の職業と国勢調査との比較

	1920年		1930年		1940年	
	高女生の家庭	国勢調査	高女生の家庭	国勢調査	高女生の家庭	国勢調査
第一次産業	10.8%	53.8%	16.3%	49.7%	13.4%	44.3%
第二次産業	18.8	20.5	14.0	20.3	17.7	26.0
第三次産業	60.5	23.7	63.5	29.8	67.5	29.0

表4 母の職業（年次別）

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945		
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	
中小企業経営							1	1.6	1	2.2			1	1.6			
恩給・金利生活者					1	6.7			1	2.2					1	1.4	
農・林・漁業	2	100.0	7	70.0	6	40.0	36	59.0	28	62.2	27	40.9	26	42.6	20	28.6	
自営商業			2	20.0	6	40.0	10	16.4	8	17.8	18	27.3	9	14.8	33	47.1	
自営工業・製造業					1	6.7	1	1.6	1	2.2	1	1.5	3	4.9	4	5.7	
医療関係	醫師														1	1.4	
		看護婦									1	1.5					
			助産婦					1	1.6	1	2.2	2	3.0				
				薬剤師													
教員	和洋裁教師		1	10.0			3	4.9	2	4.4	8	12.1	8	13.1	5	7.1	
		茶華道教師			1	6.7	3	4.9	1	2.2	2	3.0	5	8.2	1	1.4	
			技術者					1	1.6			3	4.5	2	3.3		
社員・銀行員								1	2.2					4	6.6		
自由業							1	1.6			1	1.5	1	1.6	1	1.4	
和洋裁仕立店							4	6.6	1	2.2	2	3.0	2	3.3			
計	2	100.0	10	100.0	15	100.0	61	100.0	45	100.0	66	100.0	61	100.0	70	100.0	

表4-2 母の職業（類型別）

職業分類	第1類型		第1'類型		第2類型		第3類型		合計				
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率			
中小企業経営	3	3.2							3	0.9			
恩給・金利生活者	2	2.1	1	1.6					3	0.9			
農・林・漁業	21	22.1	25	41.0	62	56.9	44	67.7	152	46.1			
自営商業	36	37.9	16	26.2	23	21.1	11	16.9	86	26.1			
自営工業・製造業	1	1.1	3	4.9	4	3.7	3	4.6	11	3.3			
医療関係	醫師			1	1.6					1	0.3		
		看護婦								1	0.3		
			助産婦					2	1.8	1	1.5	4	1.2
				薬剤師					1	0.9		1	0.3
教員	和洋裁教師		14	14.7	5	8.2	4	3.7	4	6.2	27	8.1	
		茶華道教師		4	4.2	5	8.2	4	3.7		13	3.9	
			技術者		3	3.2	2	3.3	1	0.9		6	1.8
社員・銀行員		1	1.1	2	3.3	3	2.8		6	1.8			
自由業		2	2.1			1	0.9		3	0.9			
和洋裁仕立店		3	3.2	1	1.6	3	2.8	1	1.5	8	2.4		
店員		2	2.1					1	1.5	3	0.9		
計	95	100.0	61	100.0	109	100.0	65	100.0	330	100.0			

調査でみる限りそれは立証できない。勿論戦前の家族形態は、子供の人数が多いため必然的に分家として核家族が形成されていくわけで、今日の核家族構成の要因とは異なる。一九四五年はやや大家族化の傾向がみられるのは、時代を反映しているものと言えよう。

② 兄弟の人数
 類型別にみると、第一、第三、第二類型の順になっていて、県庁の所在地もしくはこれに準ずる都市にある学校の方がより核家族化が進んでいるといえる。

③ 使用人の数
 一家庭の子供の数の平均を求めたものが表六である。これでわかるように四・四人前後で年代的・類型別変化はとくに認められない。ただ、一九四五年の五・一人という数値の上昇は、当時の国策を反映していると思われるべきであろうか。この高女生が卒業後結婚して出産する子供の人数と対比させると面白い。

表5 核家族化

	核 家 族		大 家 族	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	2	28.57	5	71.42
1915年	30	57.69	21	40.38
1920年	70	57.37	47	38.52
1925年	142	61.20	85	36.63
1930年	180	70.31	76	29.68
1935年	204	66.88	99	32.45
1940年	207	65.92	103	32.80
1945年	190	65.29	105	36.08
合 計	1,025	64.91	541	34.26
第一類型	593	66.93	288	32.50
第二類型	227	60.85	141	37.80
第三類型	205	64.06	112	35.00

表6 兄弟・使用人平均人数数

	子 供 数	使用人数
1910 年	3.43	3.14
1915 年	4.00	1.23
1920 年	4.30	1.70
1925 年	4.55	1.25
1930 年	4.42	1.31
1935 年	4.42	1.26
1940 年	4.46	1.15
1945 年	5.09	0.78
計	4.41	1.16
第一類型	4.34	1.28
第二類型	4.52	1.16
第三類型	4.31	1.00

使用人の数(表六)は平均一・二人以上で高女生の家庭では大抵使用人を置いていたことになる。もつとも仕事の関係で二、三十人を使っているところもあるので一概にはいえないが、それでもある階級の家庭像が描き出される。しかし、これも一九四〇、四五年になると減少の傾向が出てきて〇・七八人と一人を割るようになる。

(二) 高女生の生活

1 進学の意味

この項目は複数回答であるが、高等女学校への進学に際し彼女達の八割近くは「進学するのは当然だ」と考えている(表七)。一九二〇年代は高等女学校進学者も急速に増えていった時期ではあるが、それにしても全体的にみると進学率は低く一割強といったところである。この実状からみても彼女達の家庭の経済的・社会的階層がある水準を保っていたであろうことは容易にうなずける。次いで親の勧めが二割強で、教師の勧めは八%と概して少ない。しかし、一九二〇、二五年頃は一〇%をこえ、また、周囲の反対を押し退けて進学しているものも他の時期より多いのは、いわゆる大正デモクラシーの影響といえるのではなからうか。

2 高等女学校の授業

① 修身・国語・地歴

修身の教科担当は校長が六割を占めている。一九二〇年代の教育実態を分析したときにもこの教科を校長が担当するケースが多く、非常

表7 進学の意味

	進学が当然		反対を押しして		親のすすめ		教師のすすめ		兄弟と姉妹のすすめ		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85			3	42.85						
1915年	31	59.61	1	1.92	10	19.23	4	7.69	1	1.92	6	11.53
1920年	91	74.59	2	1.63	28	22.95	13	10.65	2	1.63	9	7.37
1925年	186	80.17	11	4.74	64	27.58	31	13.36	15	6.46	8	3.44
1930年	200	78.12	5	1.95	59	23.04	19	7.42	13	5.07	9	3.51
1935年	248	81.31	3	0.98	64	20.98	21	6.88	9	2.95	9	2.95
1940年	254	80.89	4	1.27	64	20.38	20	6.36	8	2.54	8	2.54
1945年	247	84.87	9	3.09	52	17.86	24	8.24	12	4.12	5	1.71
合計	1,260	79.79	35	2.21	344	21.78	132	8.35	60	3.79	54	3.41
第一類型	696	78.55	15	1.69	172	19.41	70	7.90	28	3.16	43	4.85
第二類型	297	79.62	15	4.02	95	25.46	26	6.97	19	5.09	7	1.87
第三類型	267	83.43	5	1.56	77	24.06	36	11.25	13	4.06	4	1.25

に個性的な指導がなされて
いたことがうかがわれた。

しかし、ダルトン・プラン
を実施した熊本県立第一高
等女学校では、校長吉田惟
孝が修身科を担当する割合
は三七・五%と低く、教頭
や年配の国語の女教師が受
け持っている。それにも関
わらず校長が生徒に与えた
影響力は甚だ大であったよ
うだ。修身科の専科教師は
全国の平均では二五%強で、
年代的、類型的差異は表八
からは読み取ることが出来
ない。

国語の授業で思い出す筆
頭が書き取りで六〇%、次
いで作文五七%、読書五
二%と続く(表八)。特に戦
時下では、書き取りが八

表8 修身・国語・地歴

	修身担当						歴史・地理									
	校長		専科		担任		暗記		地図作成		見学		史跡調査		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	57.14	7	100.0			3	42.85	2	28.57	2	28.57	3	42.85		
1915年	22	42.30	9	17.30	7	13.46	21	40.33	11	21.15	4	7.69	3	5.76	1	1.92
1920年	81	66.39	26	21.31	8	6.55	71	58.19	26	21.31	15	12.29	13	10.65	4	3.27
1925年	142	61.20	43	18.53	31	13.36	156	67.24	50	21.55	37	15.94	24	10.34	8	3.44
1930年	150	58.59	69	26.95	47	18.35	173	67.57	102	39.84	36	14.06	22	8.59	6	2.34
1935年	184	60.32	89	29.18	35	11.47	206	67.54	107	35.08	41	13.44	28	9.18	4	1.31
1940年	189	60.19	82	26.11	40	12.73	214	68.15	119	37.89	33	10.50	22	7.00	7	2.22
1945年	173	59.45	87	29.89	45	15.46	215	73.88	113	38.83	10	3.43	17	5.84	7	2.40
合計	945	59.85	413	26.15	213	13.48	1,059	67.06	530	33.56	178	11.27	132	8.35	37	2.34
第一類型	491	55.41	220	24.83	140	15.80	590	66.59	279	31.48	86	9.70	62	6.99	20	2.25
第二類型	247	66.21	94	25.20	43	11.52	245	65.68	149	39.94	35	9.38	24	6.43	8	2.14
第三類型	207	64.68	99	30.93	30	9.37	224	70.00	102	31.87	57	17.81	46	14.37	9	2.81

	国語											
	古文		漢文		かきとり		作文		読書		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	3	42.85	4	57.14	3	42.85	4	57.14	1	14.28
1915年	8	15.38	9	17.30	22	42.30	22	42.30	23	44.23	6	11.53
1920年	29	23.77	22	18.03	65	53.27	75	61.47	64	52.45	14	11.47
1925年	68	29.31	30	12.93	128	55.17	147	63.36	140	60.34	17	7.32
1930年	103	40.23	42	16.40	153	59.76	168	65.62	157	61.32	25	9.76
1935年	122	40.00	41	13.44	191	62.62	189	61.96	177	58.03	24	7.86
1940年	137	43.63	89	28.34	178	56.68	162	51.59	144	45.85	32	10.19
1945年	100	34.36	84	28.86	254	87.28	140	48.10	115	39.51	19	6.52
合計	570	36.09	320	20.26	995	63.01	906	57.37	824	52.18	138	8.73
第一類型	316	35.66	170	19.18	593	66.93	485	54.74	429	48.41	93	10.49
第二類型	117	31.36	73	19.57	231	61.93	209	56.03	215	57.64	14	3.75
第三類型	137	42.81	77	24.06	171	53.43	212	66.25	180	56.25	31	9.68

七%の高率となっている。

しかし、第三類型で古文・

漢文・作文のパーセンテージが高く、その分、相対的に書き取りが低くなっている。いずれにしても、今日の国語教育とは趣を異にするほど、読むこと・書くことに重点がおかれていたと判断できる。

歴史・地理(表八)の教科については暗記教科としての印象が強く六七%がこの項目をあげる。地図作成が三四%で、両者ともに年代がくだるに従ってだんだん数値が上昇している。見学・史跡調査等も一割前後を占めているが、戦時下においては五%と激減する。しかし、類型別にみると、

表9 英語

	英語の履修								英語の授業			
	希望者選択		全員必修		低学年必修 高学年選択		なし		うけた		うけない	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	2	28.57					6	85.71		
1915年	22	42.30	11	21.15	3	5.76	5	9.61	23	44.23	16	30.76
1920年	39	31.96	52	42.62	10	8.19	8	6.55	79	64.75	19	15.57
1925年	16	6.89	199	85.77	1	0.43			196	84.48	10	4.31
1930年	11	4.29	231	90.23	3	1.17	3	1.17	225	87.89	14	5.46
1935年	18	5.90	243	79.67	35	11.47			268	87.86	13	4.26
1940年	29	9.23	218	69.42	45	14.33			266	84.71	17	5.41
1945年	39	13.40	181	62.19	77	26.46	2	0.68	237	81.44	28	9.62
合計	177	11.20	1,137	72.00	174	11.01	18	1.13	1,300	82.33	117	7.40
第一類型	102	11.51	576	65.01	118	13.31	6	0.67	724	81.71	43	4.85
第二類型	55	14.74	272	72.92	38	10.18	9	2.41	281	75.33	63	16.89
第三類型	20	6.25	289	90.31	18	5.62	3	0.93	295	92.18	11	3.43

	授業内容											
	暗唱		歌		劇		会話		書きとり		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	2	28.57					1	14.28		
1915年	15	28.84	4	7.69			5	9.61	21	40.38	2	3.84
1920年	51	41.80	17	13.93	5	4.09	20	16.39	56	45.90	3	2.45
1925年	131	56.46	39	16.81	14	6.03	54	23.27	143	61.63	12	5.17
1930年	157	61.32	41	16.01	12	4.68	65	25.39	176	68.75	22	8.59
1935年	182	59.67	54	17.70	17	5.57	79	25.90	205	67.21	27	8.85
1940年	196	62.42	61	19.42	14	4.45	83	26.43	188	59.87	29	9.23
1945年	171	58.76	37	12.71	3	1.03	59	20.27	160	54.98	21	7.21
合計	906	57.37	255	16.14	65	4.11	365	23.11	950	60.16	116	7.34
第一類型	506	57.11	160	18.05	42	4.74	213	24.04	532	60.04	64	7.22
第二類型	202	54.15	44	11.79	12	3.21	62	16.62	213	57.10	9	2.41
第三類型	198	61.87	51	15.93	11	3.43	90	28.12	205	64.06	43	13.43

第三類型は史跡調査・見学が他の型の二倍の比率で高くなっている。

② 外国語

英語の授業は一九二五〜一九三五年までは希望選択の余地を残しながら、全員必修の形をとった学校が多かったことがこの資料で立証される(表九)。しかし、戦時下の一九四五年には六割と下がる。当時英語の授業廃止を文部省が指示したにも関わらず、英語の授業を受けたとするものが八割を越えていることは、それがたとえ低学年のみの履修であったとしても、高女としての面目を保とうとした現れであったと思われる。

型別にみると全員必修は第三類型が九〇%以上で、英語受講者も九二%に達している。次いで第一類型八二%、第二類型七五%となっている。授業の内容は書き取り・暗唱が六割を占めているが、会話も二五%の生徒が懐かしく思い出している。歌を歌ったり、劇をしたりいろいろ教授法を工夫した教師も多かったことが想像できる。

③ 理数科

数学(表一〇)については、他の教科とやや質問の質が異なるが、授業の印象としては、難しかったが三九%、おもしろかったが三六%となっている。もつともこの中には、難しかったがおもしろかったも含まれている。興味をもてないが二割近くあるが、今日の高校生と比較するとこの数値は低いのではなからうか。

理科(表一〇)の授業では実験(七九%)講義(七八%)が主流をなし、観察がこれに続く。一九二〇年代にはいると講義中心、知識重視の授業から、実験・観察に力が入られるようになっていったといわれるが、その傾向がこのアンケート調査にも歴然と現れている。採集・標本づくりが三〇%内外あり、

表10-1 数 学

	難しかった		易しかった		おもしろかった		興味もてない		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年					5	71.42				
1915年	16	30.76	10	19.23	17	32.69	5	9.61	5	9.61
1920年	36	29.50	15	12.29	42	34.42	16	13.11	6	4.91
1925年	84	36.20	27	11.63	98	42.24	35	15.08	9	3.87
1930年	115	44.92	25	9.76	97	37.89	31	12.10	2	0.78
1935年	127	41.63	28	9.18	91	29.83	69	22.62	11	3.60
1940年	128	40.76	24	7.64	117	37.26	76	24.20	10	3.18
1945年	115	39.51	22	7.56	97	33.33	77	26.46	7	2.40
合計	621	39.32	151	9.56	564	35.71	309	19.56	50	3.16
第一類型	347	39.16	81	9.14	331	37.35	163	18.39	31	3.49
第二類型	138	36.99	37	9.91	123	32.97	79	21.17	11	2.94
第三類型	136	42.50	33	10.31	110	34.37	67	20.93	8	2.50

た。一方、年代が下るに従って重点をおいて指導したのが楽典についての教育であった。これは第三類型四四%、第一類型三九%に対し、第二類型二四%と開きがみられる。

図画(表一二)では、風景、人物、静物に関わらず写生に多くの時間を充当していたように平均して六五%、年代が下るに従ってより多く実施された指導方法である。手本を見ながら模写する指導も四四%あり、図画指導の中で重要な指導方法であったことが窺われる。今日の学校教育における美術指導と非常に異なるところである。模写につづいてパーセンテージの高い自由画は、戦時下の一九四五年を除くと年々大幅に普及して

いる。「どんなものにも美がある。…その美を自分の目で見つけ出さなければいけないね。」と語りかけつつ、「個」の持つ美の発見への教師の誘いは、自由画への誘いであり、また、描き手の個性を引き出すことにもなったのである。類型別にみるとこの自由画、写生の指導が第一、三類型に比較して第二類型が下回る。この傾向は自由画において

表12 図 画

	模 写		自由画		静物画		人物画		風景画	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	2	28.57	2	28.57					1	14.28
1915年	28	53.84	15	28.84	10	19.23	3	5.76	12	23.07
1920年	69	56.55	33	27.04	38	31.14	15	12.29	39	31.96
1925年	114	49.13	72	31.03	85	36.63	34	14.65	78	33.62
1930年	94	36.71	103	40.23	125	48.82	52	20.31	116	45.31
1935年	114	37.37	163	53.44	153	50.16	72	23.60	137	44.91
1940年	141	44.90	158	50.31	136	43.31	77	24.52	130	41.40
1945年	136	46.73	110	37.80	130	44.67	71	24.39	103	35.39
合 計	698	44.20	656	41.54	677	42.87	324	20.51	616	39.01
第一類型	378	42.66	380	42.88	387	43.67	172	19.41	329	37.13
第二類型	178	47.72	127	34.04	153	41.01	81	21.71	163	43.69
第三類型	142	44.37	149	46.56	137	42.81	71	22.18	124	38.75

	写 生		彫 刻		粘 土		版 画		そ の 他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	14.28								
1915年	20	38.46			1	1.92			2	3.84
1920年	52	42.62	1	0.81	5	4.09	2	1.63	2	1.63
1925年	134	57.75	2	0.86	3	1.29	4	1.72	4	1.72
1930年	175	68.35	1	0.39	4	1.56	12	4.68	4	1.56
1935年	212	69.50	12	3.93	17	5.57	36	11.80	20	6.55
1940年	222	70.70	13	4.14	14	4.45	38	12.10	13	4.14
1945年	217	74.57	7	2.40	12	4.12	16	5.49	10	3.43
合 計	1,033	65.42	36	2.27	56	3.54	108	6.83	55	3.48
第一類型	580	65.46	21	2.37	234	26.41	67	7.56	40	4.51
第二類型	227	60.85	12	3.21	9	2.41	27	7.23	8	2.14
第三類型	226	70.62	3	0.93	13	4.06	14	4.37	7	2.18

特に顕著である。

体操の筆頭はダンスで平均六五%、戦時下を除けば年毎に普及した様子がよく解る(表一三)。続いて、球技が四五%、陸上が三六%で近代スポーツに対して生徒の記憶が鮮明に残っている。テニスは一九二〇年代がさかんで、このころから明治神宮での大会が開催され、選手はもとより全校生徒がその応援のために熱中したのであった。しかし、一九二五、三〇年と年代が下がるにつれて減じ、そのかわりに連帯感・親密感を育成するスポーツとしてバレーボールが登場してくる。薙刀は一九一〇年代にも学校教育の中に取り入れられ

表13 体 操

	ダンス		テニス		バレーボール		卓球		バスケットボール		球技		なぎなた	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	5	71.42	1	14.28	3	42.85			1	14.28	1	14.28
1915年	20	33.46	16	30.76	5	9.61	16	30.76	6	11.53	12	23.07	11	21.15
1920年	45	36.88	50	40.98	23	18.85	52	42.62	35	28.68	44	36.06	48	39.34
1925年	134	57.75	118	50.86	87	37.50	93	40.08	104	44.82	105	45.25	14	6.03
1930年	179	69.92	77	30.07	140	54.68	91	35.54	142	55.46	114	44.53	24	9.37
1935年	217	71.14	64	20.98	154	50.49	100	32.78	147	48.19	145	47.54	70	22.95
1940年	245	78.02	46	14.64	148	47.13	93	29.61	105	33.43	149	47.45	153	48.72
1945年	188	64.60	29	9.96	129	44.32	73	25.08	72	24.74	136	46.73	224	76.97
合計	1,031	65.29	405	25.64	687	43.50	521	32.99	611	38.69	706	44.71	545	34.51
第一類型	585	66.02	216	24.37	358	40.40	284	32.05	333	37.58	375	42.32	311	35.10
第二類型	245	65.68	100	26.80	150	40.21	131	35.12	122	32.70	177	47.45	14	37.53
第三類型	201	62.81	89	27.81	179	55.93	106	33.12	156	48.75	154	48.12	94	29.37

	肋木		平均台		とび箱		器械体操		陸上競技		水泳		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	14.28							1	14.28	1	14.28	1	14.28
1915年	15	28.84	21	40.38	19	36.53	20	38.46	7	13.46	1	1.92	4	7.69
1920年	67	54.91	78	63.93	69	56.55	53	43.44	21	17.21	4	3.27	4	3.27
1925年	108	46.55	122	52.58	132	56.89	77	33.18	65	28.01	13	5.60	28	12.06
1930年	101	39.45	114	44.53	117	45.70	120	46.87	83	32.42	37	14.45	19	7.42
1935年	111	36.39	120	39.34	133	43.60	160	52.45	140	45.90	72	23.60	27	8.85
1940年	89	28.34	94	29.93	114	36.30	131	41.71	138	43.94	87	27.70	66	21.01
1945年	64	21.99	81	27.83	98	33.67	149	51.20	118	40.54	134	46.04	26	8.93
合計	556	35.21	630	39.89	682	43.19	710	44.96	573	36.28	349	22.10	175	11.08
第一類型	335	37.81	362	40.85	372	41.98	407	45.93	322	36.34	169	19.07	113	12.75
第二類型	155	41.55	155	41.55	187	50.13	159	42.62	151	40.48	98	26.27	25	6.70
第三類型	106	33.12	113	35.31	123	38.43	144	45.00	100	31.25	82	25.62	37	11.56

ているが、一九二五、三〇年に激減、その後徐々に増えて、一九四五年に七七%に達する。大正デモクラシーの頃の洋風化傾向による伝統的色彩が強い武道からの離反、逆に戦時下の国家主義に基づいた教育の中で武道を通して錬成しようとする様子が統計の上に如実に反映している。陸上競技はあまり大きな変化はないが、一九二〇年後半ごろから積極的に導入されて行ったものと思われる。水泳も思ったより早く学校教育の中で指導されていたことが解る。類型別では第三類型にバレー、バスケットの比率が他の類型より高い。いずれにせよ、「よい母」になるためにも、また、先進国の女性に伍していくためにも、体力・体位の向上は緊急の課題であったと思われる。

⑤ 家事・裁縫

女子教育独特の家事・裁縫の教科についてはどの学校も重視したのか、あるいは、高女卒業生にとってこの教科が最も生活に直結していたためか、アンケート回答者の回答率が高い(表一四)。家事では割烹が筆頭で八五%にのぼる。正月料理のような行事食もさることながら、洋風の調理も学校教育を通して浸透して行くのである。染色指導も一九二〇年代からは半数以上の学校で導入しているし、その後の普及・増加にも目を見張るものがある。割烹・染色・洗濯といったものは講義もあつたであろうが主として実習を伴うものである。それに対し、栄養・衛生看護・住居は講義の方に重点がおかれる。これら三種とも年毎に漸増し、特に栄養はその傾向が著しい。「栄養分析」「カロリー」といった用語の登場と共に、国民の体位向

表14 家 事

	衛生看護		家計簿		洗 濯		染 色		割 烹		栄 養		住 居		そ の 他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	2	28.57	1	14.28	1	14.28	1	14.28	3	42.85	1	14.28			5	9.61
1915年	15	28.84	16	30.76	24	46.15	19	36.53	42	80.76	12	23.07	6	11.53	6	4.91
1920年	44	36.06	39	31.96	55	45.08	65	53.27	100	81.96	39	31.96	35	28.68	9	3.87
1925年	86	37.06	53	22.84	107	46.12	136	58.62	200	86.20	80	34.48	50	21.55	9	3.51
1930年	87	33.98	58	22.65	133	51.95	155	60.54	228	89.06	122	47.65	61	23.82	22	7.21
1935年	161	52.78	94	30.81	196	64.26	244	80.00	276	90.49	178	58.36	100	32.78	17	5.41
1940年	135	42.99	87	27.70	199	63.37	248	78.98	286	91.08	188	59.87	102	32.48	10	3.43
1945年	180	61.85	62	21.30	131	45.01	151	51.89	212	72.85	169	58.07	86	29.55		
合 計	710	44.96	410	25.96	846	53.57	1,019	64.53	1,347	85.30	789	49.96	440	27.86	78	4.93
第一類型	385	43.45	213	24.04	463	52.25	535	60.38	740	83.52	429	48.41	220	24.83	46	5.19
第二類型	180	43.25	95	25.46	195	52.27	258	69.16	339	90.88	187	50.13	103	27.61	23	6.16
第三類型	145	45.31	102	31.87	188	58.75	226	70.62	268	83.75	173	54.06	117	36.56	9	2.81

上のために高等女学校の生徒を通して、主婦として夫や次の世代を担う子供の望ましい食生活を管理・運営する能力の育成も射程距離の中にいれて教育していったと思われる。

家事科とやらんで将来家庭に入ってから直接的に役に立つものとして裁縫科が位置づけられる。その中心は和裁であり九五%の人が思い出している。早縫いといった基礎技術指導に始まり、相当高度なものまで実技指導を行っている(表一五)。この時代の徹底した和裁指導に対して一部の生徒は反発しているが、大半の卒業生は感謝の念を抱いている。女学校で洋裁教育が盛んになるのは一九三〇年代で、ミシンの普及・指導と相呼応している。好むと好まざるとに関わらず、この種の技術教育が当時の高女教育で重視されていたのである。その証拠として、各県の県庁の所在地に当初にできたいわゆる第一高女においても実科高等女学校に比較すれば家事・裁縫に割り当てられた授業時数は少ないものの、全時間数一二一〜一四〇時間の中で、家事・裁縫が、多い時で二二・二%少ない時で一七・八%を占め、女子特有の教科教育が施されたのである。

3 学校行事

アンケートでは、運動会・バザー・音楽会・修学旅行等多岐にわたって回答を求め、それぞれについて楽しい思い出が寄せられているが、この度は統計的処理ができる修学旅行に留めたので全容は今後の自由記述の分析にまたねばならない。一九一〇、一五年頃の修学旅行は一泊ないし二泊であったが、だんだん四泊、五泊となり一九三五年頃は四分の一の学校で一週間の修学旅行を実施している(表

表15 裁 縫

	和 裁		洋 裁		ミシン縫い		手 芸		編 物		その他	
	実 数	百分率	実 数	百分率	実 数	百分率	実 数	百分率	実 数	百分率	実 数	百分率
1910 年	5	71.42	4	57.14	4	57.14	2	28.57	7	100.00	1	14.28
1915 年	52	100.00	13	25.00	28	53.84	20	38.46	25	48.07	9	17.30
1920 年	115	94.26	32	26.22	60	49.18	54	44.26	38	31.14	9	7.37
1925 年	218	93.96	80	34.48	118	50.86	88	37.93	67	28.87	47	20.25
1930 年	236	92.18	160	62.50	190	74.21	117	45.70	84	32.81	21	8.20
1935 年	285	93.44	237	77.70	252	82.62	178	58.36	131	42.95	29	9.50
1940 年	299	95.22	263	83.75	264	84.07	212	67.51	173	55.09	37	11.78
1945 年	285	97.93	230	79.03	219	75.25	160	54.98	97	33.33	18	6.18
合 計	1,496	94.74	1,019	64.53	1,135	71.88	831	52.62	625	39.58	171	10.82
第一類型	839	94.70	560	63.20	616	69.52	468	52.82	369	41.64	74	8.35
第二類型	361	96.78	245	65.68	287	76.94	204	54.69	130	34.85	47	12.60
第三類型	296	92.50	214	66.87	232	72.50	159	49.68	126	39.37	50	15.62

一六)。中には朝鮮・満州まで足をのばし船旅であったため一五日間の修学旅行を実施した学校も少なくなかった。しかし、この鮮満旅行も一九四〇年に修学旅行の制限が文部省通牒として出されたため不可能になる。また、一九四四年には「決戦非常措置要綱」が出され、そのため修学旅行が中止になり、大変残念であったとの記述がある。この時期は九〇%近い学校が実施していない。

この時代における修学旅行は単なる物見遊山ではなく、広く社会に目を向け、時にはその後の人生にも大きな影響を及ぼすような体験を味わうような者もあった。

4 家庭学習の時間

生徒の家庭での学習時間の分布及び平均時間を表したのが表一七である。この項目の回答率は全回答者の四七・六%と半数にも充たないが、平均学習時間からみて、年代的变化は特にみられず、二時間余の家庭学習である。しかし、中には五時間以上の生徒もいる。類型別にみると第三、第一、第二の順で減少している。

5 通学時間・方法

平均すると自宅通学が八六%と大半を占めるが(表一八)、一九二〇年までは寮生活者・下宿生活者が二〇〜三〇%にのぼる。一県一

表16 修学旅行の日数

	日帰り		1泊2日		2泊3日		3泊4日		4泊5日	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	14.28	4	57.14						
1915年	12	23.07	9	17.30	10	19.23	4	7.69	3	5.76
1920年	10	8.19	40	32.78	17	13.93	13	10.65	11	9.01
1925年	10	4.31	23	9.91	42	18.10	54	23.27	23	9.91
1930年	2	0.78	14	5.46	19	7.42	31	12.10	33	12.89
1935年	2	0.65	4	1.31	12	3.93	41	13.44	44	14.42
1940年	1	0.31	2	0.63	13	4.14	53	16.87	43	13.69
1945年	4	1.37	13	4.46	5	1.71	1	0.34		
合計	42	2.65	109	6.90	118	7.47	197	12.47	157	9.94
第一類型	26	2.93	65	7.33	61	6.88	98	11.06	88	9.93
第二類型	11	2.94	30	8.04	38	10.18	53	14.20	32	8.57
第三類型	5	1.56	14	4.37	19	5.93	46	14.37	37	11.56

	5泊6日		1週間		1週間以上		中止・なし	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年					1	1.92		
1915年								
1920年	6	4.91	7	5.73				
1925年	15	6.46	28	12.06	6	2.58		
1930年	26	10.15	51	19.92	20	7.81		
1935年	37	12.13	72	23.60	33	10.81		
1940年	47	14.96	66	21.01	38	12.10		
1945年			2	0.68	1	0.34	192	65.97
合計	131	8.29	226	14.31	99	6.26	192	12.15
第一類型	75	8.46	137	15.46	54	6.09	107	12.07
第二類型	20	5.36	46	12.33	22	5.89	56	15.01
第三類型	36	11.25	43	13.43	23	7.18	29	9.06

表17 家庭学習の時間

	1時間		2時間		3時間		4時間		5時間		それ以上	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年			1	14.28	1	14.28						
1915年	5	9.61	9	17.30	3	5.76	1	1.92				
1920年	9	7.37	28	22.95	7	5.73	2	1.63	2	1.63		
1925年	17	7.32	40	17.24	25	10.77	6	2.58	6	2.58		
1930年	13	5.07	54	21.09	33	12.89	7	2.73	6	2.34		
1935年	32	10.49	78	25.57	32	10.49	13	4.26	6	1.96	1	0.32
1940年	46	14.64	77	24.52	45	14.33	8	2.54	5	1.59		
1945年	21	7.21	57	19.58	38	13.05	8	2.74	9	3.09	1	0.34
合計	143	61.75	344	21.78	184	11.65	45	2.84	34	2.15	2	0.12
第一類型	89	10.04	191	21.55	114	12.86	25	2.82	19	2.14	1	0.11
第二類型	30	8.04	83	22.25	33	8.84	4	1.07	3	0.80		
第三類型	24	7.50	70	21.87	37	11.56	16	5.00	12	3.75	1	0.31

表18-1 通学場所

	自宅通学		下宿通学		寄宿舎	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	57.14			1	14.28
1915年	39	75.00	3	5.76	13	25.00
1920年	88	72.13	7	5.73	22	18.03
1925年	191	82.32	4	1.72	29	12.50
1930年	216	84.37	7	2.73	15	5.85
1935年	272	89.18	9	2.95	20	6.55
1940年	293	93.31	5	1.59	14	4.45
1945年	260	89.34	8	2.74	15	5.15
合計	1,363	86.32	43	2.72	129	8.16
第一類型	744	83.97	23	2.59	88	9.93
第二類型	326	87.39	12	3.21	25	6.70
第三類型	293	91.56	8	2.50	16	5.00

表18-2 通学方法

	徒歩		自転車		バス・電車・汽車	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	57.1				
1915年	40	76.92			2	3.84
1920年	79	64.75	1	0.81	17	13.93
1925年	148	63.79	1	0.43	43	18.53
1930年	154	60.15	7	2.73	77	30.07
1935年	182	59.67	21	6.88	99	32.45
1940年	187	59.55	24	7.64	105	33.43
1945年	167	57.38	23	7.90	96	32.98
合計	961	60.86	77	4.87	439	27.80
第一類型	585	66.02	17	1.91	218	24.60
第二類型	211	56.56	44	11.79	84	22.52
第三類型	165	51.56	16	5.00	137	42.81

表18-3 通学時間

	30分以内		1時間以内		1時間以上	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	14.28	2	28.57		
1915年	31	59.61	7	13.46		
1920年	62	50.81	27	22.13	5	4.09
1925年	103	44.39	52	22.41	26	11.20
1930年	105	41.01	81	31.64	28	10.93
1935年	145	47.54	89	29.18	46	15.08
1940年	159	50.63	103	32.80	27	8.59
1945年	143	49.14	92	31.61	21	7.21
合計	749	47.43	453	28.68	153	9.68
第一類型	457	51.58	217	24.49	80	9.02
第二類型	142	38.06	130	34.85	47	12.60
第三類型	150	46.87	106	33.12	26	8.12

校に設置された高等女学校に通学するため、遠隔の地から入学する生徒がいたことを意味する。この傾向は第一高女に見られる。高女普及と共に減少し一割以下となる。

通学方法は、徒歩通学者が大半であるが、乗り物利用者も多く、一九二五年が一九〇年だったのが二〇年後には三三%と年代が下がるにしたがつて漸増する。

通学時間は、三〇分以内が半数で、一時間以上が一割を占める。今日の高校生の通学時間と大差ないのではないかと思われる。

6 卒業後の進路

平均して最も多いのは進学の一三%で年代が進むにつれて増加している(表一九)。ついで家事手伝い・花嫁修行の三四%でこれは年代が進むにつれて減少の傾向にある。高女卒業後すぐ就職するものは少なく平均一八%で一九二〇年を基準にすると、一九四五年では二倍強の増加状況である。これらを類型別にみた場合、第一類型が第一、第三類型に比し、進学がやや少なく就職が多いが統計上は有為な差があるとはいえない。進学した学校の種別からの検討を必要とするだろう。

(三) 卒業後の生活

1 就職経験

就職経験の有無を質問すると、表二〇に示されているように、短期間でも就職したものを含めると一九三〇年代からは就職経験なしを上回るようになる。先に記した高女卒業後の就職は二割を下回るものの、戦時中の動員及び戦後の厳しい生活の中で女性の社会的進出が実現していったといえよう。一九四〇年卒業生の就職経験六七・五%の数値はその事を証左している。この項目については類型別差異は認められない。

表20 就職経験

	有		無	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	1	14.28
1915年	13	25.00	26	50.00
1920年	33	27.04	50	40.98
1925年	91	39.22	79	34.05
1930年	98	38.28	102	39.84
1935年	140	45.90	122	40.00
1940年	212	67.51	76	24.20
1945年	194	66.66	86	29.55
合計	784	49.65	542	34.32
第一類型	436	49.20	309	34.87
第二類型	186	49.86	131	35.12
第三類型	162	50.62	102	31.87

表19 卒業後の進路

	進 学		就 職		家事手伝い		家事手伝い 花嫁修行		そ の 他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	42.85	1	14.28			2	28.57		
1915年	8	15.38	7	13.46	1	1.92	26	50.00	2	3.85
1920年	26	21.31	15	12.29	1	0.81	54	44.26	2	1.63
1925年	73	31.46	27	11.63	2	0.86	86	37.06	13	5.60
1930年	77	30.07	31	12.10	4	1.56	107	41.79	18	7.03
1935年	113	37.04	46	15.08	4	1.31	121	39.67	19	6.22
1940年	157	50.00	77	24.52	5	1.59	70	22.29	12	3.82
1945年	118	40.54	81	27.83	8	2.74	78	26.80	17	5.84
合計	575	36.41	285	18.04	25	1.58	544	34.45	83	5.25
第一類型	329	37.13	143	16.13	14	1.58	308	34.76	40	4.51
第二類型	122	32.70	83	22.25	7	1.87	136	36.46	20	5.36
第三類型	124	38.75	59	18.43	4	1.25	100	31.25	23	7.18

2 結 婚

結婚については既婚率九〇%で年代別変化・類型別差異はみられない(表二一)。ただ、第三類型に未婚者一五%と他の類型に比べて六倍前後多いのが目立つ。「結婚するのが当然である」と考えていたこの時代にあつて、大半の女性は大きな疑義を抱くこともなく、むしろ憧れをもつて結婚生活に入り、そこで幸せな家庭を築くために努力をしたのである。ただ、戦争のためあるいは病気のために若くして未亡人になつた方々のその後の生活の厳しさは筆舌につくしがたいものがあつたようである。また、横暴な夫に仕えることの理不尽さを綴る人もある。

3 子供の数

高女生自身の兄弟数は四・四人であつた(一)―3―②参照)が、高女生が結婚して出産した子供の数は平均二・八三人と大幅に減少している。年代別にみても表二二でわかるように一九二〇年と一九四五年の間で平均子供数において一・〇六人少なくなつてゐる。一般に、妻の学歴と出生率は逆比例の関係にあり、妻の学歴が低いほど出生児数が多く、妻の学歴が高いほど出生児数が少ない傾向があるといわれるが、これが当時の国民一般の傾向とどの様に呼応しているかを調べる必要がある。

4 夫の職業

表二三の夫の職業と親の職業とを比較してみると、農・林・漁業の第一次産業の減少、一方いわゆるサラリーマンとしての会社員・銀行員および官吏(公務員)の急増が指摘できる。ただ、第二類型においては第一次産業の占める割合が他の類型より多い。

高等女学校生徒の家庭の社会的ステータスは標準よりは高かつたと思われるが、高女生が卒業後築いていった家庭はさらにそれを上回る階層になつたものが多かつたことがこの統計から推測できる。このことから高等女学校を出るといふことは、それにふさわしい男性との結婚を想定していたといえよう。

表22 年代別平均子供数

年代	人数	子供数
1910年	5	5.60
1915年	47	3.64
1920年	99	3.30
1925年	199	3.35
1930年	236	3.15
1935年	282	2.87
1940年	292	2.41
1945年	278	2.24
平均	1,438	2.83

表21 結婚の有無

	結婚した		結婚しなかった	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	6	85.71		
1915年	45	86.53	2	3.84
1920年	101	82.78	4	3.27
1925年	203	87.50	4	1.72
1930年	227	88.67	14	5.46
1935年	276	90.49	20	6.55
1940年	286	91.08	23	7.32
1945年	263	90.37	15	5.15
合計	1,407	89.10	82	5.19
第一類型	804	90.74	24	2.70
第二類型	342	91.68	9	2.41
第三類型	261	81.56	49	15.31

表23 夫の職業（年次別）

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察																
裁判所													1	0.4		
軍人					4	3.8	7	3.9	5	2.2	13	5.3	11	4.0		
官吏			8	16.3	16	15.2	30	16.8	44	10.5	41	16.7	47	17.3	29	11.2
市町村長・議員等									2	0.9					2	0.8
地主			1	2.0			1	0.6			1	0.4				
大企業経営者					1	1.0	4	2.2	6	2.7	5	2.0	9	3.3	18	6.9
中小企業経営者			2	4.1	1	1.0			1	0.4	3	1.2	3	1.1	2	0.8
恩給・金利生活者													1	0.4		
農・林・漁業	2	33.3	2	4.1	3	2.9	11	6.1	14	6.2	10	4.1	17	6.3	10	3.8
自営商業	1	16.7	9	18.4	10	9.5	16	8.9	27	11.9	34	13.9	22	8.1	31	11.9
自営工業・製造業			3	6.1	5	4.8	3	1.7	10	4.4			7	2.6	5	1.9
医療関係者	1	16.7	5	10.2	12	11.4	16	8.9	12	5.3	20	8.2	22	8.1	23	8.8
教員			8	16.3	9	8.6	34	19.0	27	11.9	34	13.0	36	13.2	46	17.7
神職・住職	1	16.7			6	5.7	4	2.2	5	2.2	1	0.4	1	0.4		
技術者			2	4.1	4	3.8	4	2.2	10	4.4	9	3.7	10	3.7	3	1.2
会社員・銀行員	1	16.7	8	16.3	31	29.5	46	25.7	60	26.5	66	26.9	79	29.0	84	32.3
自由業			1	2.0	3	2.9	3	1.7	3	1.3	8	3.3	6	2.2	7	2.7
工業労働者																
計	6	100.0	49	100.0	105	100.0	179	100.0	226	100.0	245	100.0	272	100.0	260	100.0

和洋女子大学紀要 第二十七集(文系編)

表 23-2 夫の職業（類型別）

職業分類	第1類型		第1'類型		第2類型		第3類型		合計	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察										
裁判所	1	0.2							1	0.1
軍人	20	4.3	5	1.6	7	2.6	8	2.8	40	3.0
官吏	67	14.2	56	17.4	56	20.9	36	12.7	215	16.0
市町村長・議員等	1	0.2	2	0.6	1	0.4			4	0.3
地主	3	0.6							3	0.2
大企業経営者	21	4.5	7	2.2	5	1.9	10	3.5	43	3.2
中小企業経営者	4	0.8	5	1.6	2	0.7	1	0.4	12	0.9
恩給・金利生活者							1	0.4	1	0.1
農・林・漁業	14	3.0	12	3.7	29	10.8	14	4.9	69	5.1
自営商業	39	8.3	47	14.6	23	8.6	31	10.9	150	11.2
自営工業・製造業	14	3.0	5	1.6	8	3.0	6	2.1	33	2.5
医療関係者	48	10.2	23	7.1	16	6.0	24	8.4	111	8.3
教員	63	13.4	47	14.6	38	14.2	46	16.2	194	14.5
神職・住職	5	1.1	4	1.2	3	1.1	6	2.1	18	1.3
技術者	18	3.8	11	3.4	4	1.5	9	3.2	42	3.1
会社員・銀行員	137	29.2	92	28.7	71	26.5	85	29.9	375	27.9
自由業	14	3.0	5	1.6	4	1.5	8	2.8	31	2.3
工業労働者										
計	469	100.0	321	100.0	268	100.0	284	100.0	1,342	100.0

四、考 察

親の職業を国勢調査と比較してみると、いわゆる中産階級の占める割合が一九二〇年以降多くなっている。これは高等女学校が増設され、普及していったことと相関関係にある。

この階級の子女が入学する女学校は、教育内容を近代化し、より高度な知識・技術を教育するとともに、一方では女性としての特性の發揮の必要性や家事労働の重要性を強調し、科学的知識をとり入れ、生活の合理化のできる人材の育成を目的としていた。思想的な面で啓蒙的な役割を多く担った学校もあれば、技術に重点をおく学校もあつた。また、同じ学校でも時代によって方針は大きく変更していったことも事実である。文部省の方針に準拠し、地域住民の意志を反映しながら、各学校で地道な実践が展開されていったのである。今回、アンケート調査が一九一五年以降であるため、高女令期或はそれ以前の女学生の声は集録できなかつたが、一概に体制イデオロギーの女子教育としての良妻賢母主義教育が浸透していったとはいえないかと思われる。その顕著な現象が、高女卒業後の進学率の上昇にみることができ、一九二二年に開かれた全国高等女学校長会では「女子高等教育の普及を徹底せしめる為」に学校制度の検討を行い、女子の高等教育を求める動きが活発になり、これを廻つての論議も盛んに行われ、当時の女子生徒の進学熱に对应しようとする。今回の調査での平均進学率は三六％あるが、東京府立第一高女同じく第五高女では五六％の高率を示している。

この高等教育への進学熱とともに、就職の増加現象を指摘することができる。婦人労働者といえば紡績業を中心とした生活困窮者階級に限られていたのが、一般の家庭の子女もオフィス・ガールとして近代的職業に就職を希望した。もともとこの時代はあくまでも結婚までの腰掛けで在職年数は二〜三年といったところである。職業婦人になるのは望ましくないとする風潮も一方では根強く残っていた時代である。

今回の分析にあたって、高等女学校を三類型に分類したが、第二類型には概して近代化の遅れがみられ、第三類型には第一類型を志向する傾向が鮮明であり、学力重視とともに体育や各種行事を盛んにして学校としての特色をだしつつ、第一類型の学校に優るとも劣らない学校を形成しようとした姿勢が窺われる。この点が私立学校と違った公立学校の長所であると共に限界であるともいえる。

今後、アンケートに記された生の声を分析し、必要に応じて面接・聞き取りを実施していく予定である。また女子中等教育の大事な

一翼を担った私立女学校についても同時に調査を推進していきたい。

注

- (1) 東京都立高校入学者選抜検討委員会は昭和六二年春の入試に向けて九月二五日「女子の募集人員が全体の三分の一を下回っている高校は、三分の一以上には是正する必要がある」との改善策を出した。
- (2) 明治三四年東京府高女入学者二四九人中 農業一六(六・四%)、商業三九(一五・七%)、官吏六〇(二四・一%)、銀行員一九(七・六%)、医師二三(五・二%)、教員一一(四・四%)、工業一〇(四・〇%)、専門六(二・四%)、雑一四(五・六%)、無職六一(二四・五%) 『婦女新聞』
明治三四年八月二六日に掲載、百分率は筆者算出
- (3) 高等女学校・実科高等女学校については下表に據る。
- (4) 山本禮子・福田須美子「高等女学校の研究—一九二〇年代の教育実態をめぐって—」『和洋女子大学紀要第二六集』一九八六

付記

本アンケート調査は「昭和六〇年度特色ある教育研究」として、和洋女子大学(山本禮子)が、日本私学振興財団の特別補助金を得て、実施したものである。謝意を表するとともに、アンケートに答えて下さった方々及び、関係学校同窓会にお礼申し上げる。

なお、本研究は高等女学校研究会プロジェクトチームの研究の一部である。

高等女学校・実科高等女学校の概況

(『人間発達研究』第8号 1983)

項 目		大正2年	大正9年	大正14年
学校数	高等女学校	213	336	618
	実科高等女学校	117	178	187
生徒数	高等女学校	68,366	125,583	275,822
	実科高等女学校	14,920	25,700	25,624
入学者(本科志願)	高等女学校	31,608	84,302	142,058
	実科高等女学校	5,722	11,958	11,635
入本学者科	高等女学校	18,402	34,874	74,890
	実科高等女学校	5,069	8,770	8,881
入本歩合科	高等女学校	58.10%	41.49%	52.72%
	実科高等女学校	85.79%	73.34%	76.33%
。就学率	高等女学校	3.2%	5.6%	11.4%
	実科高等女学校	0.5%	0.9%	不祥
	高等女学校及び実科高等女学校	3.7%	6.4%	算出不能**

* 12才の全国女性人口の高等女学校及び実科高等女学校就学者の割合
(日本帝国人口状態統計、国勢調査報告、文部省年報より作成)

** 高等女学校及び実科高等女学校の就学率はほぼ1割強とみられる。

《高等女学校に関するアンケート》

質問 1. あなたの生年月日, 出生地をお書きください。

明治 年 月 <出生地> 都道府県 市
大正 年 月 <出生地> 都道府県 市
昭和 年 月 <出生地> 都道府県 市

質問 2. あなたが高等女学校に在学になさったのはいつですか。

明治 年 月 <卒業> 明治 年 月
<入学> 大正 年 月 <卒業> 大正 昭和 年 月
<高等女学校名> 府立 高等女学校
県立 市立 町立 都立

質問 3. 高等女学校入学時のあなたの家族構成についておたずねします。同居していた方に○をつけてください。

兄弟姉妹は別居の方も数に入れてください。
祖父, 祖母, 父, 母, 兄 () 人, 弟 () 人, 姉 () 人,
妹 () 人, 叔父, 叔母, 使用人 () 人
父の仕事 ()
母の仕事 ()
その他 ()

質問 4. 高等女学校入学時, あなたのご両親のお仕事は何でしたか。

父の仕事 ()
母の仕事 ()
その他 ()

質問 5. 高等女学校に入学なさったのは, どのような理由・動機からですか。あなたのお気持ちやご両親の考えをお聞かせください。入学動機として該当するものに○をつけてください。

- a. 自分の意志で入学した
1. 進学するのが当然だと思ったから
2. 周囲が反対だったが, 自分で希望した
b. 親にすすめられたから
c. 教師にすすめられたから
d. 兄弟姉妹にすすめられたから
e. その他 (具体的に記入ください)

高等女学校の歴史 (日本) 栗田

質問 6. 在学中の授業についておたずねします。

(1) 次の各教科目につき, 記憶に残っていることをなるべく具体的に書きください。○はいくつつけても結構です。

a. 修身の授業はあなたが担当なさいましたか。また, どのような教えが印象に残っていますか。校長, 修身の先生, 他の教科の先生, その他 (具体的に印象に残っていること) ()

b. 国語の授業で重点がおかれたことに○をつけてください。 ()

古文, 漢文, かきとり, 作文, 読書, その他 (具体的に印象に残っていること) ()

c. 歴史・地理の授業で重点がおかれたことに○をつけてください。 ()

暗記, 地図作成, 見学, 史跡調査, その他 (印象に残っていること) ()

d. 英語の授業はありましたか。 ()

1. 希望者のみ
2. 全員がうけていた
3. その他 () 無

英語の授業をあなたはうけましたか。うけた方は, どのようなことを行いましたか。 ()

うけた うけなかった
暗唱, 歌, 劇, 会話, 書きとり, その他 (印象に残っていること) ()

e. 数学の授業の印象はいかがでしたか。 ()

難しかった, 易しかった, おもしろかった, 興味がもてなかった, その他 (印象に残っていること) ()

f. 理科の授業にあった事例に○をつけてください。 ()

講義, 実験, 観察, 採集, 標本づくり, 飼育, その他 (印象に残っていること) ()

R. 音楽の授業で行ったことに○をつけてください。

唱歌, 合唱, 器楽(ピアノ・バイオリン・オルガンなど)楽典,

その他()

印象に残っていること

()

h. 図画の授業では, どのようなことをやりましたか。

手本を見て模写, 自由画, 写生(静物画, 人物画, 風景画など),

彫刻, 粘土, 版画, その他()

印象に残っていること

()

i. 体操の授業では, どのようなことをやりましたか。

ダンス, 球技(テニス・バレーボール・卓球, バスケットボールな

ど), なぎなた, 器械体操(助木・平均台・とび箱)など, 陸上競

技, 水泳, その他()

印象に残っていること

()

j. 家事の授業では, どのようなことをやりましたか。

衛生看護, 家計簿, 洗濯, 染色, 割烹, 栄養, 住居,

その他()

印象に残っていること

()

k. 裁縫の授業ではどのようなことをやりましたか。

和裁, 洋裁, ミシン縫い, 手芸, 編物, その他()

印象に残っていること(早縫い, 礼服縫いなど)

()

l. 教育の授業はありましたか。また, 内容はどんなものでしたか。

有() 無()

m. 公民の授業はありますか。また, 内容はどんなものでしたか。

有() 無()

n. その他の科目について, あったものに○をつけてください。

養蚕, 機織り, 農業, 園芸, 畜産, その他()

()

(2) 授業の方法はどのようなものでしたか。

a. 教科書のみ

b. 副読本・参考書併用

(具体的にわかっていらしたら書いてください。)

c. 特色ある授業方法だった(例えば, 自学自習, ガルトン, フラン

ど, 日記や作文を書き先生が添削したなど)

また, どのようなことが印象に残っていますか。ご自由にお書きくだ

さい。

質問 7. 学校行事についておたずねします。

(1) 修学旅行は河泊位でどこへ行きましたか。また, 印象に残っているこ

とをお書きください。

(2) 遠足はありましたか。年何回位ですか。どのような記憶がありますか。

有(年 回位)・無()

(3) 運動会については, どのような思い出がありますか。

()

(4) 音楽会やバナーについては, どのような思い出がありますか。

()

(5) 講演会の講師として, どのような方がいらっしやいましたか。

話の内容と思い出に残る事柄をお書きください。

()

()

質問 8. 課外活動(授業以外の活動)についておたずねします。

(1) 校友会活動(例えば文芸部, 演劇部, 庭球部)などはさかんでしたか。

あなたはどのような活動をなさいましたか。

()

(2) 生徒会活動は行われましたか。あなたは参加しましたか。

() ()

(3) 学校以外で学習する時間はどの位でしたか。

() ()

(4) 在学中に、教科書以外にどのような本や雑誌を読みましたか。

() ()

(5) 世の中の動きにどのような注意をはらっていましたか。

() ()

質問 9. 先生方についておたずねします。

(1) 印象に残っている先生(好き嫌い、影響を受けた)などには、どのような先生がいらっしゃいますか。

a. 校長先生

() ()

b. 男の先生

() ()

c. 女の先生

() ()

(2) 先生に、進路や生き方、悩みごとなどを相談しましたか。

() ()

(3) 男の先生の出征についての思い出がありますか。

() ()

(4) 女の先生の出産・子育てについて、どのように思っていましたか。

() ()

質問 10. 友人についておたずねします。

(1) 親しい友人はいましたか。どのようなことが印象に残っていますか。

() ()

(2) 上級生、卒業生とのつながりがありましたか。どのようなことが印象に残っていますか。

() ()

(3) 生き方や進路、悩みごとなどを友人に相談しましたか。

() ()

質問 11. 通学と寄宿舎についておたずねします。

(1) 通学方法と時間をお書きください。(あてはまるものに○をつけてください。)

a. 自宅通学 …… 徒歩・自転車・その他 () 約 時間

b. 下宿通学 …… 徒歩・自転車・その他 () 約 時間

c. 寄宿舎 …… 徒歩・自転車・その他 () 約 時間

(2) 寄宿舎にはいった方は、寮内での生活はどのようなものであったか、お書きください。

() ()

(3) 舎監の先生の思い出をお書きください。

() ()

(4) 寮生どうしの交流にどのようなものがありましたか。印象に残っていることは何ですか。

() ()

質問 12. 高女在学中に、あなたの生き方・考え方に影響を与えた人物、事件等は何ですか。

質問 13. 実現しなかったが在学中に本当はしたかったこと、卒業後なりたかった職業等がありましたらお書きください。

質問 14. その他、学生生活全般で印象に残っていることをお書きください。

質問 15. 卒業後の進路はどのような形をとりましたか。あてはまるものに○をつけ、具体的に記入ください。

- (1) さらに上級の学校に進学した(具体的な校名:))
 (2) 就職した(具体的な職業名:))
 (3) 家庭で花嫁修業をした)
 (4) 職業ではないが、社会的な活動を行った)
 (5) その他())

質問 16. 現在に至るまでの活動についておたずねします。あてはまるものに○をつけ、具体的に記入ください。

- (1) 一度就職したが辞めた(辞めた理由:))
 (2) 一度も就職しなかった(理由:))
 (3) 再就職した 時間:)
 どのような経緯で:)
 仕事の内容:)
 (4) 就職して現在も継続中(具体的に:))
 (5) 就職はしなかったが、社会的な活動は行った)
 (具体的に:))

質問 17. 戦争中は、どのような生活をしていらしましたか。

質問 18. 結婚についておたずねします。

- (1) あなたは結婚しましたか。
 結婚した 結婚しなかった
 (2) 結婚についてどのような考えを持っていたかお書きください。

(3) 結婚なさった方は、夫の職業、子供の人数をお書きください。

夫の職業())
 子供の人数(人))

質問 19. 高等女学校の教育が、あなたの人生にどのような影響を与えたと思いますか。良かったこと、悪かったこと、現在ふり返ってみて、役に立ったこと、足りなかったことなどについて具体的に書きください。

質問 20. 現代及びこれからの女子中学生、高校生の教育のあり方について、ご意見をお聞かせください。

質問 21. 在学時代のノート、日記類や写真、文書等向ても結構ですから、資料をお持ちの方はお教えください。
 ())
 ご協力ありがとうございました。

今後、問い合わせさせていただきたい場合もございますので、よろしかったらあなたのご住所、お名前をお教えください。

ご住所	〒	□	()
お名前	様		